

NITSカフェ報告書	実施機関名・連携機関名 弘前大学教職大学院
	セミナー名：【NITSカフェ in 弘前大学教職大学院】 双方向でつながろう！オンラインの授業を体験してみませんか
	開催日時：令和3年2月20日 13時30分～16時10分 開催場所：オンライン上（弘前大学（青森県弘前市文京町1）） 参加人数と参加者の属性：現職教員8人、大学院生4人、大学院教員10人（合計22名）

## テーマ：

### （1）課題の設定

新型コロナウイルス感染症対策のためやむを得ず登校できない児童生徒に対する学習指導として、指導計画を踏まえたテレビ会議システムによる適切な家庭学習が求められている。しかし、青森県の小・中・高・特別支援学校では、前記の取り組みに関する準備・研修機会に恵まれず、困り感を抱えている教員が多い。この課題を解決するため、弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻ミドルリーダー養成コース1年次院生（以下、M1院生）8名で話し合い、オンライン上での授業実践について教員・児童生徒双方の立場に立って理解を深めることができる機会を設けることにした。

### （2）テーマの設定

課題に基づいて4テーマを設定し、M1院生がそれぞれ担当するテーマの準備から運営まで取り組んだ。

- ①テーマ1「Z o o mの機能进行操作してみよう」
- ②テーマ2「T e a m sによるメディア授業を体験して」
- ③テーマ3「Z o o mを活用した模擬授業を体験してみよう」
- ④テーマ4「G o o g l e M e e tの操作体験」（事前希望制）

## 内容：

- （1）テーマ1では、Z o o mの基本的な操作演習の時間と位置づけ、画面表示や音声、チャットを使った意見交換、資料配布、画面共有などに取り組んでもらった。失敗しても大丈夫であることをはじめに宣言し、温かい雰囲気づくりを心掛けることで、参加者の不安を取り除きながら進行することができた。
- （2）テーマ2では、T e a m sの操作画面をZ o o mで共有した。学ぶ側の視点では、クラウドデータ共有の利便さ、グループワークの実際、課題のオンライン提出、授業の前に資料を確認できるといったメリットを紹介した。また、教員の視点ではM1院生から聞き取ったオンライン研究授業のメリット・デメリットを伝えた。これにより、参加者が自分事の課題としてオンライン授業を捉えてもらうことができた。
- （3）テーマ3では高等学校・数学会場と中学校・社会会場を設けた。参加者は児童生徒役として取り組む設定とし、M1院生がZ o o mの機能を活用した模擬授業を実践した。事前にM1院生で画面共有、挙手からの発言、チャット、キャプチャーボードを使った映像配信などを練習したことで、本番では円滑に実施することができた。終了後は今後のオンライン授業実践を想定した意見交換が活発に行われた。
- （4）テーマ4で用いたアプリは今後本県で主流となることが予想されている。そのためテーマ1・3で用いたZ o o m機能と共通する機能を取り上げて基本操作演習を実施した。

## 成果：

M1院生が協働的に準備を行う過程で新たな課題が生まれ、それを一つずつ解決していくことができた。その結果、オンラインによるNITSカフェ運営では、参加者の悩みに寄り添い、ともに学びあう研修機会を作り上げることができた。参加者からは「操作に不安があったが、丁寧に対応してもらえたことで不安が解消された（中学校教諭）」、「現場で活用できる情報をいただき感謝している。校内研修で活用したい（高等学校教諭）」、「オンライン授業の工夫点が参考になった（大学院生）」、「教職大学院修了生や多くの現職教員が参加しており、これからのオンラインを考える大変よい空間が創出されていた（大学院教員）」という感想をいただくことができた。

## アイデアや工夫したこと：

- （1）学校現場で活用するアプリが多岐にわたることを想定し、複数のミーティング用アプリを活用した。
- （2）学校現場ですぐに活用できることを想定し、用いる資料の構成を工夫した。
- （3）模擬授業で使う機能を協議し、それを参考にテーマ1で取り組む演習内容を構成した。
- （4）双方向授業のために効果的な機能（画面共有、挙手、音声、チャット）を使い模擬授業を実施した。
- （5）県内で先進的な取り組みをしている教員に参加・協力していただいた。事前打ち合わせのうえ、最後に事例紹介を紹介していただくなど、学校現場の声を取り入れることができた。

## <写真・図など>

図1 Zoom機能演習



齋藤院生による操作演習。はじめは慣れない操作に参加者の戸惑いがみられたが、慣れてくると時折笑顔が見られるようになった。

図2 Teams 実演と発表



澤田院生による発表。Teamsの長所として授業ごとにクラス設定できること、クラウド上のデータ共有のメリットなどを複数の視点から説明し、好評を得た。

図3 第一会場 高等学校・数学



授業者は木村院生、司会進行は相馬院生が担当。チャット機能で質問を受け付け、キャプチャーボードを活用してカメラ映像を配信したりするなど、より対面に近い雰囲気でもオンライン授業を実践した。

図4 第二会場 中学校・社会



授業者は山本院生、司会進行は阿部院生が担当。世界史領域を授業するにあたり、電子教科書や動画をダイナミックに使い、生徒の発想や発問を促すオンラインのメリットを取り入れた授業実践を行った。

図5 司会者によるチャット画面の質問確認



司会はPCで共有画面を表示し、サブモニターで参加者の挙手やチャット記入を確認した。質問の回答を個人あてに送信するなど、丁寧な対応を心掛けた。

図6 画面共有の様子 (G Meetより)



説明資料では文字の羅列にならないよう、画像や演習を交えて紹介することを心掛けた。これは参加者のOJTや校内研修活用を意識してのことであり、M1院生で協議・工夫しながら準備した。